

「正直、完全によそ者の私を受け入れてくれたことにびっくりしました。まさに『来るもの拒まず』って感じ」と内田さん。「聞き取り前に、私の正体と目的をお知らせしていたとは言え、当日まで私がどんな人間か分からないです」と続けます。

「もともと赤名連坦地に目を付けたのは、自動運転車両『い〜にゃん号』が走っていたからなんです」と内田さん。幼い頃から、地元鳥取県大山町で、誰も乗っていないバスが走っているのを目の当たりに。「公共交通」に関心を持つようになったと言います。

内田さんはどんな人なのだろう。どんなことを考えているのだろう。なぜ、この地を選んだのだろう。そう感じた人が、たくさんいるはずですよ。今なお、赤名連坦地に人が住み続ける理由、地域が維持されている理由は何なのか。「それを探るのが私の卒業研究なんです」と話します。

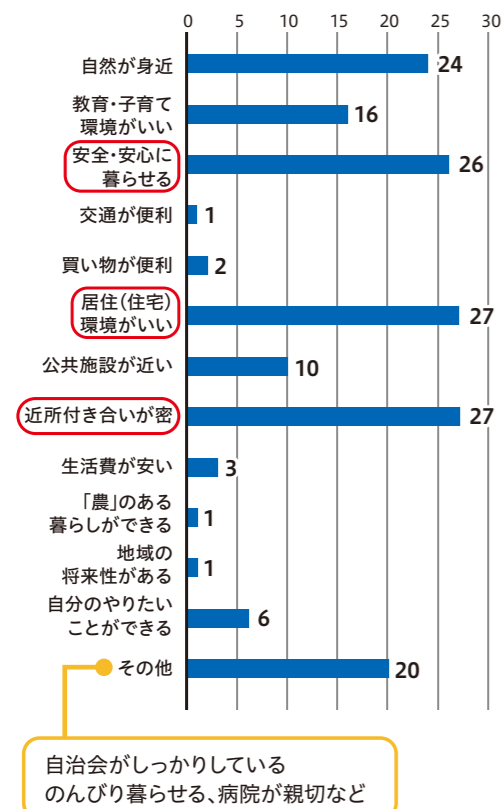
「公共交通」をテーマに研究しようとしたところ、作野教授からアドバイスが。「せっかくなら、公共交通と、地域での暮らしの2つの観点で研究してみてもいいのでは」と。

赤名連坦地に内田さんが現れたのは、令和5年9月。約1カ月間で、連坦地とその周辺のお宅を100件訪問。ペンとバイナダーを手に、住み心地や日常生活、赤名の未来像などを事細かく聞いて回りました。

「これからおよそ100年前。赤名連坦地には、商店や旅館、病院が約70軒立ち並び、町中を歩くだけで生活に必要なことが揃っていたそうです。交通の便が良くなり、三次や出雲に出て、買い物が可能に。町外で買った方が安いので、その流れはさらに加速。個人商店はほとんど閉店したと言います。」

住みやすい点(複数回答)

近所付き合いが活発で、おしゃべりしたり、助けあったり。車を持っていない人を乗せてあげたりすることも

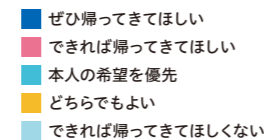


自治会がしっかりしているのんびり暮らせる、病院が親切など

帰還希望

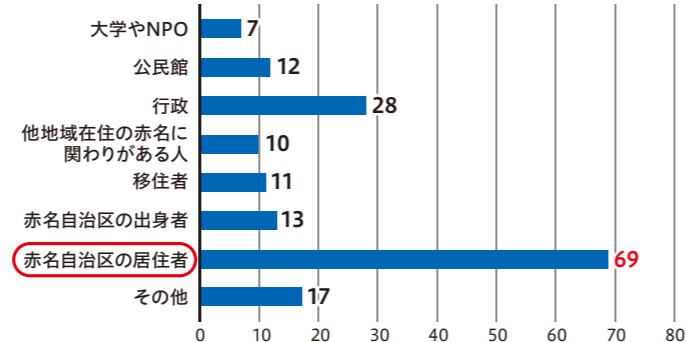
農地を持つお宅が少なく、「継ぐものが住居しかない」という特徴も。跡継ぎに「帰ってきて」と強く言えないのが現状

帰ってきても生活ができない
働く場所がない
医療・福祉の面が心配



赤名を持続させるための主体

人が減り、空き家が増える赤名連坦地。暮らしを維持するために、誰が動くべきか。「居住者」という回答が大多数



驚愕の精神「来るもの拒まず」

発見の連続「心強い生の声」



若者、バカ者、よそ者……。そんな単語が、中山間地域を漂うようになったのはいつからか。誰かが動くのを、ただ待っているだけでいいのだろうか。待っているだけじゃ、何も始まらない。

小さな一歩の原動力。
不安よりも、FUNであれ。

「おー、また来たんか。次はいつ来るんかいな」。そんな声が、赤名連坦地に響きます。
「次は11月に。赤穴八幡宮のはやしにお邪魔しようかなと思ってます」と内田さん。いつもここに来ると、顔馴染みの人と道端で立ち話になるのだそう。「ひよっとしたら、昔は連坦地の至る所で、井戸端会議が勃発していたのかもしれないね」と続けます。
少しして手元の時計を覗く内田さん。「あ、もうこんな時間。今日はこの辺で失礼します。次の予定があるので」とお辞儀し、この場を後に。姿が見えなくなるまで注がれる視線に、いつの間にか温かさを感じるようになりました。

今日も勃発「井戸端会議」

ゆか 内田有香さん(22歳)
島根大学教育学部社会科教育専攻地理学ゼミ(作野教授)所属。山陰の中山間地域に足を運び、地域の現状調査や「いいところ探し」に奮闘中。馬術部に所属したり、愛車のバイクを乗り回したりするアグレッシブな大学4年生



内藤さん(右)宅ではコーヒーで乾杯。他愛ない話に真剣な話。今日も長居の内田さん



毎回違う話題で盛り上がる2人。日高さん(左)宅の縁側から響く笑い声

